

研究主題「自閉症の障害特性に配慮した音楽指導の工夫

視覚的な手がかりを活用した教材の開発と活用」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課

東京都立田無養護学校 教諭 植田美佳子

研究のねらい

東京都教育委員会は、「これからの東京都の特別支援教育の在り方について（平成 15 年 12 月）」で、自閉症等の特性に応じた教育の充実を提示している。その中で、自閉症について、「障害特性から他の知的障害児童・生徒とは異なる指導内容・方法や学習環境の工夫・開発を必要とする場合が多く、自閉症に特化した専門的指導を行うことについてのニーズは高い。」としている。

近年、自閉症に特化した教育実践が多く報告されている。しかし、特別支援学校における一斉指導の音楽の授業においては、自閉症の障害特性に配慮した指導が十分行われているとは言えない。自閉症の生徒が自発的に音楽の表現活動を楽しむためには、今一度その障害特性を理解し、その上で支援の在り方を考えていくことが大切である。そこで障害特性に配慮した教材を作成し、音楽の一斉指導の場における指導の工夫について研究を進めた。

研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 自閉症の障害特性への配慮の必要性

自閉症は、「社会性・対人関係の障害」「コミュニケーションの障害」「強いこだわりや固執的行動」の3領域の行動特徴で定義されている。加えて「過敏性からくる困難性」や「パニックなどの情動のコントロールの問題」「セントラルコヒーレンス(中心的首尾一貫性*1)の問題」「シングルフォーカス(*2)の問題」などがあり、自閉症の生徒の指導にはこれらのことを個に応じて配慮することが必要である。

* 1 どの情報が必要で不必要かの判断が苦手なために情報をまとめて全体主旨を理解することが難しいこと

* 2 同時に2つ以上の事柄を意識内にとらえること(複数の情報の同時処理)ができないこと

独立行政法人国立特殊教育研究所「自閉症実践ケースブック」より

(2) 自閉症の障害特性に応じた有効な学習の手だて

自閉症の人は、一般的に聴覚的な情報処理より視覚的な情報処理が得意であり、加えて言語のみより動作を伴った学習が有効である。さらに活動に際しては、見通しをもてるよう提示の工夫を考へることや成功体験への配慮も大切である。本研究では、対象とする自閉症の生徒の知的な障害との関連もあり、アセスメント結果等を基に指導内容の工夫が必要であることを確認した。これらのことを考察して有効な指導の手だてを実践し、検証することとした。

2 研究仮説の設定

知的障害特別支援学校の音楽の授業において、視覚的な手がかりを活用した教材を用いて指導することで、自閉症の生徒の集中力が向上し自発的に考えたり表現したりすることができる。

3 実践研究

「自閉症の障害特性に配慮した音楽指導の工夫
視覚的な手がかりを活用した教材の開発と活用」

(1) 検証授業の実施

知的障害 A 特別支援学校の高等部において、視覚的な手がかりを活用した教材を作成して指導を行いその有効性を検証した。今回の研究では、学校教育相談のグッドイナフ人物画知能検査で、発達年齢が 4 才から 8 才の学習グループに所属している自閉症の生徒 3 名を対象とした。対象生徒 3 人のアセスメントの結果と個別指導計画から課題を確認し、指導の工夫を検討した。

(2) 自閉症の障害特性に配慮した指導の工夫および配慮

自閉症の障害特性から、以下の五つの視点に配慮して教材を作成し指導した。

表 1 視覚的な手がかりを活用した指導の工夫点および配慮点

工夫と配慮	具体的内容例
ア 提示方法の工夫	カードやスライドなど提示する媒体について、ねらいに応じて使い分けを行う。
イ 適正な情報量での提示	一度に提示する情報量を少なくして理解しやすく配慮したり、まとめて提示して全体を確認させる工夫をする。
ウ 見通しをもたせる工夫	活動内容をイラストで具体的に提示し理解しやすくする。予定表を始業時、終業時の振り返りに活用する。
エ イメージをもたせる工夫	イラストや写真で活動内容や歌詞の意味などを理解しやすいように提示する。強弱やリズムを視覚的に提示する。
オ その他の配慮事項	・ 成功体験を重ねることで表現活動への自信を深めさせる。 ・ 動作を伴う活動を通して理解を深めさせる。

(3) 指導計画

題材名「リズムを感じて楽しもう」(2 時間扱い)

リズム指導の、拍を打つ活動、拍子をとる活動、リズムパターンを打ち分ける活動、及び歌唱活動を行った。

(4) 教材の開発および指導の工夫

拍を打つ活動：「ラデッキー行進曲」に合わせて、強弱をつけて手拍子を打つ活動を行った。

[表 1 よりアイウエオに対応した支援]

曲の全体構成を図で提示し、繰り返し部分などの構成を視覚的に理解できるようにした。

(図 1) また、の大小で強弱が分かるように提示した。音楽を聞く部分ではイラストを

提示し、拍を打たない部分であることを理解させ、さらに、教員と共に演奏模倣を行うことで動きを通して演奏している楽器をイメージさせた。

活動に取り組む際は、初めに 3 段のみ表記した図を提示し、活動内容 (弱拍・強拍の部分・音を聞く部分) を確認させた。その後、全体構成を示した図を見て曲に合わせて手拍子を打つ活動を行った。

拍子をとる活動：拍子のとりやすい 4 拍子を設定し、「小さな世界」に合わせて手拍子を打つ活動を行った。[表 1 よりアイエに対応した支援]



図 1 拍を打つ活動提示例

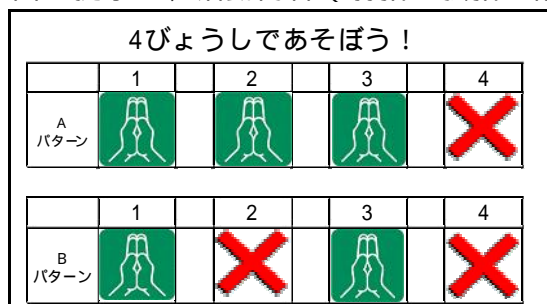


図 2 拍子をとる活動提示例

4拍のまとまりを、イラストで提示し活動内容をイメージさせた。(図2) Aでは、4拍目を休符にして拍子を意識させた。

活動に取り組む際は、図から活動内容がイメージできたか、生徒の理解を確認した。次にAのみ提示して打てるようになってから、Bの練習を行った。また、曲に合わせる際は、スライドのアニメーション効果を活用して、リズムに従ってタイミングを提示した。

リズムパターンを打ち分ける活動：曲に合わせてリズムパターンを打ち分けた。

[表1よりアイエに対応した支援]リズムパターンに絵や言葉をつけて、イメージしやすいよう提示してリズム打ちを行った。(図3)

1枚のカードに1つのリズムパターンのみを記入し、情報量を少なくして分かりやすく提示した。カードに記入するリズムについての情報は、イラストのみの場合と言葉と のリズムを入れる等の情報量の調整を、生徒の理解に応じて行った。

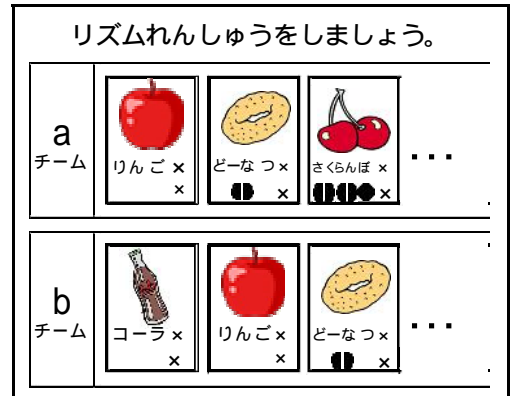


図3 リズムパターンを打ち分ける活動提示例

活動に取り組む際は、ゆっくりのテンポから始めて少しずつテンポを速めたり、16ビートやラテンなどいろいろなジャンルの曲に合わせて練習を進めた。また、カードを並べ替えて別のリズムパターンにしたり、2チームでリズムアンサンブルを行ったりした。

歌唱活動：歌唱活動で「ハッピー・メロディー」を歌った。単元のねらいと関連させ、リズムカルな曲を選曲して、リズムを感じて歌うことを行った。

[表1よりアイエに対応した支援]スライドで曲に合わせて歌詞を提示した。(図4)

フレーズごとに歌詞を提示することで一度に提示する情報量を減らし、表現することに集中できるように配慮した。また、歌詞の内容をイメージできるよう前奏・間奏・後奏の間にイラストを入れて提示した。歌詞とイラストは、セントラルコヒーレンスへ配慮して同じスライドには入れないようにした。

活動全体を通して：活動内容をカテゴリー（歌唱・リズムなど）で提示して始業時に確認、終業時に自己評価させ見通しをもたせた。また活動が自信につながるよう、成功体験に配慮した。

研究の結果と考察

1 検証授業の結果

拍を打つ活動において対象の3人の生徒は、図を見て通りに正しく手拍子が打てたことに加えて、 の大小の意味を理解して強弱を打ち分けることができた。また、笑顔で手拍子を打ち、演奏模倣をまねて、生き生きと動作を入れながら曲に親しむ様子が見られた。

拍子をとる活動においては、3人全員が4拍子を理解して打つことができた。また、図を見て自ら試し打ちを行うなど、考える様子が見られた。しかし曲に合わせる活動では、紙で提示



図4 歌唱活動提示例

「自閉症の障害特性に配慮した音楽指導の工夫
視覚的な手がかりを活用した教材の開発と活用」

した4拍子のまとまりを繰り返すうちに、スムーズに拍の頭に戻れず1拍めが欠けてしまうことがあった。そこで、スライドのアニメーション効果を活用してタイミングを分かりやすく提示すると正確に打つことが可能になった。また、途中でリズムがずれたことに気づき、自らスライドを見て改める様子が見られた。

リズムパターンを打ち分ける活動では、絵と言葉をヒントにリズムを考える姿が見られたことに加えて、1回目から概ね曲に合わせて打つことができた。特にラテンの曲でリズム打ちを行うと、頭の上で手拍子を打つなどの楽しむ様子が見られた。2チームでのリズムアンサンブル活動では、別のリズムパターンを聴きながら自分のパートを打つことができた。

歌唱活動においては、視線をそらさず歌詞のスライドを見て歌うことができた。独唱した生徒については、緊張しながらも最後まで集中して歌い、周囲の賞賛に笑顔を見せていた。練習が進むと歌詞を覚えた部分で視線をそらす場面が見られたが、覚えていないところではスライドに視線をもどし、すぐその場面の歌詞から途切れずに続けて歌うことができた。

2 考察

視覚的な手がかりを活用した教材により、対象生徒全員が活動ごとのねらいをすべて達成することができた。課題について自発的に考え自ら表現し、集中して取り組めたことから、仮説の有効性を確認できた。対象生徒の様子から、視覚的な手がかりを活用した指導の工夫について、以下のとおりに考察する。

(1) 適正な情報量での提示と調整について

情報量が少ないと短時間で内容を理解してスムーズに活動できるが、逆に活動全体が見通せなくなるということが生徒によっては生じる。どこまで演奏するのかを確認するなど、活動の終わりをはっきりさせてから情報量を調整するなどの工夫も必要であることがわかった。

対象とする自閉症の生徒が、今どの情報を必要としているのかを適切に判断するとともに、常に情報量について考慮することが必要である。

(2) 視覚的な手がかりを活用した指導の効果

授業において提示する視覚的な情報は、授業の予定表のように活動の見通しに関するものと、楽曲の構成やイメージに関するものを分けて考える必要があることが分かった。これらは、ねらいに合わせて使用する媒体の工夫が必要となる。特に楽曲の構成やイメージに関するものは、曲の流れに合わせて提示することが重要である。楽曲の雰囲気や強弱、歌詞の内容、構成などすべてを視覚化して提示することは難しいが、可能な限り曲と共に提示することで、自閉症の生徒が意欲的に活動に参加でき、楽曲の内容が理解しやすくなったと考える。

障害特性に配慮し、視覚的な手がかりを活用して指導の工夫を行うことで、自閉症の生徒が活動に自発的に参加し楽しむ様子が見られた。このことから、障害特性に配慮した指導を行い、生徒が成功体験を積み、自信を付けていくことが自閉症の生徒の指導には重要である。

今後の課題

今後は、自閉症の生徒の表現力をより深めるために、これまでの指導における評価の観点を明確にする。そのうえで、自閉症の障害特性に配慮した音楽指導の工夫について、器楽や鑑賞といった他の領域での研究を進める。